

# 在日中国人留学生の異文化適応に関する質的研究

殷 夢茜 お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科

青木紀久代 お茶の水女子大学大学院

## 要約

本研究は中国人留学生の異文化適応の特徴とそれに影響を及ぼす要因を探索的に探ることを目的とした。そのため、日本に滞在する中国人留学生 111 名を対象に質問紙調査を実施した。自由記述式項目の回答について KJ 法による分類を行った結果、「日本文化による要因」、「対人関係における困難」、「個人の特性や能力」、「社会背景による要因」、「中国文化による要因」、「偏見」、「日本への同一化が期待される現状と同一化することへの抵抗」、「日中文化に基づく適応しやすさと適応しにくさ」の 8 つのカテゴリーが生成された。得られたカテゴリーについて、先行研究を踏まえて考察した。そして今後は、異文化適応理論、特に青年期のアイデンティ課題にも関わる文化変容態度理論の日本における応用可能性を検討していく必要があると考えられる。

**キー・ワード**：異文化適応 中国人留学生

## I はじめに

2008 年日本政府はグローバル戦略を展開する一環として「留学生 30 万人計画」を発表し、当時 14 万人の在日留学生を 2020 年までに 30 万人に増やすことを目標にした(文部科学省・外務省・法務省・厚生労働省・経済産業省・国土交通省, 2008)。それ以降、来日する留学生の数は急速に増加し、2016 年には 26 万人を上回った(独立行政法人日本学生支援機構, 2017)。現在では、日本はアジアにおける留学生受け入れ大国となっている(OECD, 2015)。留学生は自文化から異文化へ移行する際に、異文化適応の課題に直面する。彼らが異文化社会にいかに適応していくかは、心身の健康のみならず、学業目標の達成とも深く関わる重要な問題となっている(Zheng & Berry, 1991)。

## II 問題と目的

### 1. 異文化適応に関する国外での研究

異文化適応の定義は研究者によってさまざまであり、多様な適応形態を含んでいる。Ward & Rana-Deuba(1999)によれば、適応の内容によって「心理的適応(Psychological adjustment)」と「社会文化的適応(Sociocultural adaptation)」という 2 つに分類される。前者の心理的適応は個人の心理的 Well-being や身体的健康状態を指している(Schmitz, 1992)。そして、後者の社会文化的適応は文化変容(acculturation)を担う個人が、新しい環境で日常生活をどの程度送れるか、すなわち新しい環境に適合(Fit-in)できる能力を指している(Berry & Sam, 1997)。この心理的適応と社会文化的適応は異なる概念とされているが、両者の間には相関関係も認められており、社会文化的適応が心理的適応に影響を及ぼす傾向が観察されている(Berry, 2006)。

また、異文化適応は、文化変容の結果(Outcome)として表れるものである。文化変容とは「異なる文化を有する個人からなる集団が片方、あるいは両方の元の文化様式に対して継続的な接触を通じて変化を受けける現象を指す」と定義されている (Redfield, Linton & Herskovits, 1936)。もとは集団レベルの概念だったが、1954年に米国社会科学研究評議会によって、文化変容の概念に心理的な側面が加えられ、文化変容の概念は個人レベルにまで拡張した (Social Science Research Council, 1954)。

このように、文化変容はプロセスを指している。このプロセスは文化変容を担う個人の変化プロセスだけでなく、個人が関わる母国とホスト国の2つの文化グループが異文化接触によって相互に影響し、変化していくプロセスでもある。

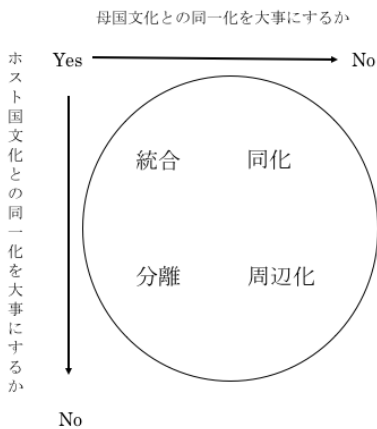


図1 文化変容態度四類型(Berry, 1980)

Berry(1980)は移民を対象として、ホスト国文化に対する態度と母国文化に対する態度という2つの軸を想定し、当てはまりの度合いに高低の二次元を組み合わせ、文化変容態度として4つの類型を考えた(図1)。この4つの文化変容態度は、統合(integration)、同化(assimilation)、分離(separation)、周辺化(marginalization)と設定されている。このうち、「統合」は母国文化との同一化とホスト国文化との同一化が共に高い状態のことである。この「統合」は、最も良い異文化適応

へと繋がっていく文化変容態度であることが、移民を対象とした先行研究の中でも報告されている(Berry, Kim, Minde, & Mok, 1987)。また、同様の結果が、在米中国人留学生を対象とした研究でも報告されている。在米中国人留学生におけるホスト国(アメリカ)の文化との同一化は、好ましい社会文化的適応と心理適応の両方に繋がること示唆されている(Wang & Mallinckrodt, 2006)。

さらに、「文化的距離」の概念も、異文化適応に影響を及ぼす重要な要因の一つとして報告されている(Berry, 1997)。文化的距離は Babiker ら(1980)によって提唱された概念であり、文化変容を担う個人が関わる2つの文化集団の社会及び文化間の差異を示す(Babiker, Cox & Miller, 1980)。文化的距離が遠いほど、個人が文化変容において多くの困難を抱えることが指摘されている (e.g., Ward, Bochner, & Furnham, 2001)。

## 2. 異文化適応に関する国内の研究

アメリカを中心に行われてきた異文化適応に関する研究は、在日留学生を支援する際に多くの示唆を提示している。しかし、異文化適応及び文化変容は文化背景と深く関わる概念であるため、母国やホスト国が異なるならば、その解釈も新たに行う必要がある。先行研究から得られたこれまでの理論や知見に基づき、日本に焦点を当てた研究を深めることが、日本に滞在する留学生の異文化適応を促す支援策を探る上で必要であろう。

日本における在日留学生の異文化適応に関する研究の先駆けは、岩男・萩原(1987)による留学生の対日イメージ研究である。その後、在日留学生の増加に伴い、留学生の異文化適応に関する研究も行われてきた。適応の実態を見ると、在日留学生は言語の問題や修学の問題、経済面での困難、対人関係上の困難などを抱えていることがわかっている(田中・田畑, 1991; 葛, 2003)

個々の留学生が抱える問題については明らかに

応度に関する調査はあまり行われていない（葛，1999）。在日留學生の中でも、特に中国人留學生は最も大きなサブグループといえる。一般的に、中国と日本における文化的距離は漢字の使用という共通性もあり、近いと考えられている。中国人留學生は非漢字文化圏出身の學生と比較すると、日本における社会文化的適応をしやすい状態にあると考えられている（井上，2007）。

しかしながら、数少ない中国人留學生を対象にした研究では、中国人留學生は、ホスト国である日本の現地大学生だけでなく、英語圏からの留學生と比較しても、精神的健康度が低く（朝野・北田・野原，1998；馬，2007；Ozeki，Knowles，Ushijima & Asada，2006），他国の留學生と比べて適応に困難が多いことを指摘している（葛，2007）。また、アメリカにいる中国人留學生との比較から、在日中国人留學生は社会文化的適応が在米中国人留學生より良い状態にあるのに対し、心理面ではより多くの苦痛を抱えている状況が明らかになっている。さらに、文化変容態度の視点から見ると、在日中国人留學生は在米留學生と比較して、母国文化との同一化に関しては差が見られなかったが、ホスト国(日本)文化への同一化が高いことがわかった。ホスト国文化との高い同一化は好ましい社会文化的適応に繋がったが、心理的適応との関係は見られなかった(殷,2016)。

以上のことから、日本における中国人留學生の異文化適応については、これまでの先行研究から明らかになっている文化的距離や文化変容態度からの解釈では説明できない点が多いことは明らかである。

### Ⅲ 本研究の目的

そこで、本研究では (a) 中国人留學生の日本という環境における異文化適応の特徴と (b) それに影響を及ぼす要因探索的に探ることを目的とする。

## Ⅳ 方法

### 1. 対象者

調査対象者は、在日中国人留學生と在日中国人留學生の支援に携わる公的及び私的機関のスタッフである。111名の回答者のうち、中国国籍ではない在日留學生10名を分析から除いた。在日中国人留學生61名、留學生支援に携わるスタッフ40名の合計101名を対象とした。

### 2. 調査時期

2017年5月に実施した。

### 3. 調査方法

自由記述形式の質問紙調査を実施した。留學生支援機関NPO、大学の国際支援機関、学友会の承諾を得て、メーリングリストで調査の協力を呼びかけた。その結果、日本の高等教育機関に在籍する留學生から回答の協力を得られた。説明合意書は資料に掲載した。回答はいずれも無記名とし、SurveyMonkeyで実施した。

### 4. 倫理的な配慮

調査実施においては、調査票の冒頭で調査の趣旨と、分析に当たっての回答内容は統計的に処理されるため、個人は特定されないことを記し、回答をもって、調査に同意されたものとみなした。調査で得られたデータは厳重に管理した。

### 5. 調査内容

質問票はフェイスシート及び自由記述からなる。自由記述の教示内容は「中国人留學生の日本での異文化適応度は、他の国の留學生より低いと言われています。また、日本にいる中国人留學生はアメリカにいる中国人留學生より社会的側面でうまく適応しているのに、心理面ではより多くのストレスを抱えていることが分かっています。このことについてどういった理由が考えられると思いますか。ご自身の経験からお答えください。」である。

なお、本調査には中国語と日本語両方を使用した。

## 6. 分析方法

得られた回答は川喜田(1967)の KJ 法の手続きを用い、バイリンガルの臨床心理学専攻の大学院生1名、バイリンガルの心理学専攻の大学院生2名が協議を行い、分析した。

## V 結果と考察

対象者101名の自由記述からカテゴリーを267個抽出した。カテゴリーの内容の親近性を吟味し163個のカテゴリーに統合した。さらに、163個のカテゴリーから、更に8つの大カテゴリーに分類した(表1)。また、8つのカテゴリーの関係を図2に示した。

以下、先行研究の結果と照らし合わせながら、8つのカテゴリーについて考察を行った。

### 1) 日本文化による要因

「日本文化による要因」は40個(15.0%)のカテゴリーが該当した。このカテゴリーは留学生が日本文化特有の特徴に関して困難を感じていることを示している。この困難は、主にコミュニケーションにおける困難と日本式の多文化主義における困難という2つに分類できる。

まず、コミュニケーションにおける困難については、語学力の問題が挙げられる。外国語(日本語)能力の高低が、円滑なコミュニケーションの妨げになることは、先行研究においても指摘されており、日本語能力と異文化適応の関係が言及されている(葛, 2003; 湯, 2004)。しかし、今回の調査から、日本での学習開始時における日本語能力の高低だけでなく、日本語機能がある程度身につくまで生じる困難もあることがわかった。

本調査から、日常生活のコミュニケーションにおいて、言葉自体の意味だけでなくコミュニケーションに関わる両者の関係性、また話している文脈への理解も求められることに対する困難感があることが明らかになった。そこには、暗黙の了解

の難しさも含まれていた。つまり、会話を成り立たせるためには、語学力以外の要素が多く含まれている、ということである。このため、高いレベルの日本語能力を有することは、留学生が日本での衣、食、住など基本的日常生活のニーズを保証するものとなるが、必ずしも高水準のコミュニケーションとは結び付くわけではない。また、本調査対象者は日本で生活するなかで、周囲から「やさしい日本語」よりも「正しい日本語」を使用するように強いられると感じており、日本語によって作り上げられた文化に圧倒されたような印象を受けていた。そのため、日本語を使うこと自体にストレスを感じている状況があることもうかがえた。

また、国際化が進む中で、日本は積極的に外国の文化を受け入れるようになってきている。その一方で、文化を受け入れる姿勢と、異国の人々を受け入れる姿勢には温度差があることも指摘されている。小坂井(1996)は、日本は(異文化の)情報やモノは歓迎するが、それらを持ち込む人間に対しては、拒否する傾向を指摘している。日本は2006年に発表した「多文化共生の推進に関する研究会報告書：地域における多文化共生の推進に向けて」の中で、日本における外国人支援、特に日常生活における支援として、多言語による情報提供や多文化を考慮した上での教育システムの構成を視野に入れている(総務省, 2006)。これにより、様々な国から来た人々が日本でのシステム、文化、言語など様々な面で感じる困難が緩和され、日本で実際に生活することが可能になった。しかしながら、アイデンティティや種族の問題については未だ触れられないままであることが議論されている(Nagy, 2012)。

本研究の調査対象者も、日本における国レベルの社会福祉サービスが充実していること、また日本での生活は安心できると報告していた。その一方で、個人レベルとしては、日本は単一民族であるために外国人に対して閉鎖的であり、個性より協調性が強調されるため、外国人としてストレス

表 1.KJ 法より抽出されたカテゴリー

大カテゴリー	中カテゴリー	小カテゴリー	カテゴリー数
日本文化による要因	コミュニケーションの難しさ	本音と建前がわかりにくい	8
		暗黙のルールがわからない	9
		日本語に出来上がった文化に圧倒的に支配されると感じている	2
		日常生活でも正しい日本語が求められるように感じる	4
	日本式多文化主義	日本語を使うことへストレスを感じる	2
		単一民族	2
		実は外国人に対して閉鎖的である	3
		自己より協調性が重視される	5
		留学生も対象にされる福祉サービスが充実しているので、生活は安心	9
		異なる者を排除する傾向がある	5
対人関係における困難	ホスト国人との関係における困難	上下関係が厳しい	14
		(ホスト国の人と)友情の深い友達ができにくい	5
		縦の関係と横の関係が求められる対人関係に不慣れ	2
		ホスト国の人に拒否される経験が多い	5
		ホスト国の狭い関係に不慣れ	2
	中国人との関係における困難	母国の友達が日本のイメージが悪い	9
		母国の友達が維持しにくい	2
		同じく日本にいる中国人友達との間でも「どっちをとる」というジレンマに直面する	4
		中国人留学生は自ら適応しようとしていない	8
		来日動機は自らではない	4
個人の特性、能力	スポーツ等の趣味は他の学生よりすくない	2	
	学力に問題がない	2	
	学校-生活のバランスが取れない	9	
	生活自体は問題ないのですが、ホスト国の人と生活上の一体感を持つことが難しい	2	
	青年期の自立課題	10	
	中国文化による要因	愛国心	6
		面子が原因で一人で頑張ってしまう	10
		母国のコミュニティで関係を完結してしまう	5
		自分の文化を重ねる	2
		自分自身の状態への意識が不足している	10
日本への同一化が期待される現状と日本と同一化することへの抵抗	中国人だからうまく日本文化に同化できると期待されている	10	
	日本文化同化するの当たり前と思われている	6	
	日本文化へ同化することに対して抵抗感を感じる	14	
	偏見により適応が悪くなった	日本人はアジア人より英語圏の人を関わりたいを感じている	6
偏見	外人扱いによる疎外感を感じている	2	
	中国は下に見られているように感じる	2	
	偏見によりお互いの高感度がどんどん下がる	2	
	偏見を訴えても理解してもらえない、または体験自身が否定される、気持ちが消化できない	9	
	偏見により適応が良くなった	お客さん扱いより日常生活において困難が少ない	12
社会背景と関わる要因	日本社会自体が抑圧社会と感じている	2	
	日本の留学生サポートに繋がりにくい、または必要とされるサービスがない	17	
	留学生の低年齢化傾向	4	
	メディアの報道にいらいらを感じる事が多い	2	
日中文化に基づく適応しやすさと適応しにくさ	文化類似性により良い適応	衣、食、住などの社会側面において類似点が多い	2
		日本の規範や文化を自分の国の文化の延長線にあるものと見なしている	2
	文化類似性により悪い適応	外貌など見た目が類似している	5
		ホスト国の人は文化間の差異を無視されやすい	2
		留学生自身が文化間の差異を無視しやすい	6

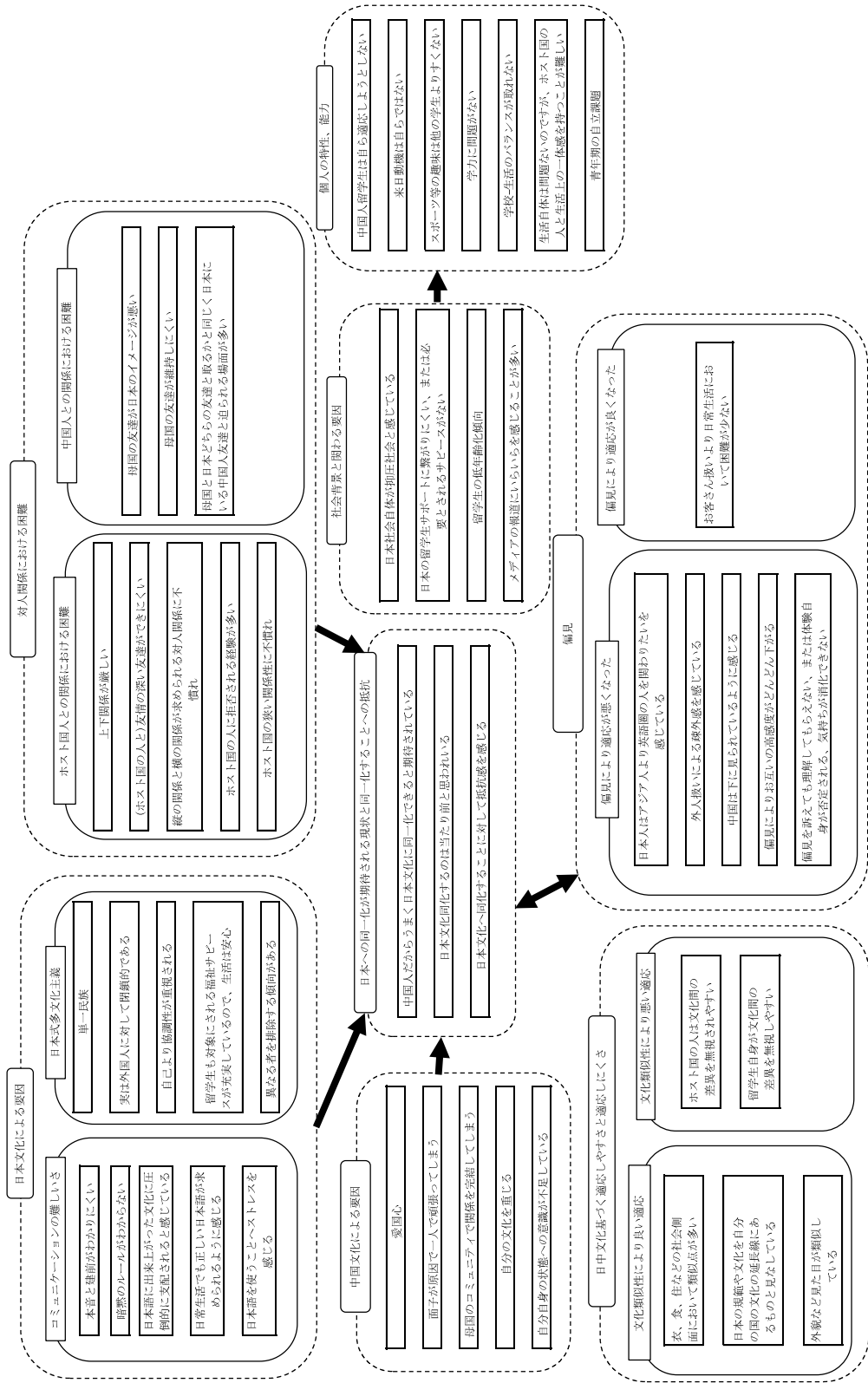


図2.在日中国人留学生の異文化適応に影響する要因

を感じる場面が多いことも報告されていた。

## 2) 対人関係における困難

「対人関係の難しさ」は43個(16.1%)のカテゴリーが該当した。このカテゴリーは、留学生を感じるホスト国である日本人、または同じ中国人との関係における困難な体験を示している。

ホスト国の人々との対人関係における困難は、留学生を対象とした研究で取り上げられるようになってきた(e.g., 田中, 2000)。今回の調査結果からは、対人関係面での困難は、ホスト国の人々との間だけではなく、母国の人々との間でも見られることがわかった。在日中国人留学生は、日本で生活するなかで、日本という環境に対する様々な感情を抱えている。日中における歴史を考慮するならば、お互いの国民に対するイメージは、歴史問題など様々な情報に基づいて形作られたものであり、必ずしも実態に即した形を取るわけではない。母国の人々が歴史的背景に基づき日本を低く評価してしまう心理状態は、留学生の心理とは矛盾している場合もあり、ストレスに繋がる可能性が考えられる。加えて、日本に同じように滞在している中国人留学生同士の関係においては、母国と日本どちらの友達を取るか迫られる場面もあることもうかがえた。このように、両国がそれぞれ抱える想いなど、歴史的背景が関わる問題として、ホスト国の人々と、母国の人々、その両者間での対人関係における困難に遭遇した場合、中国人留学生たちは、多くのストレスを感じる可能性がある。

## 3) 個人の特性や能力

「個人の特性や能力」は37個(13.9%)のカテゴリーが該当した。このカテゴリーでは、留学生及び留学生支援に携わるスタッフ両方の視点から留学生の異文化適応に影響する個人要因を示している。

個人の特性、能力に関しては、主に4つの小カテゴリーが生成された。まず、中国人留学生は他国の留学生よりも、日本へ積極的に適応しようと

しないことが報告された。また、学校、生活のバランスがうまく取れないことも望ましくない適応につながる要因と考えられる。次に、アルバイト経験に関してだが、大学入学前にアルバイトをした経験がある中国人留学生4割未満となり、6割以上の中国人留学生はアルバイト経験がなかった(趙・孫, 2008)。たったひとりで異国に来て、学業、生活、アルバイト、というバランスを取るには時間が必要であると考えられる。

さらに、先行研究と同様に、中国人留学生の来日動機は異文化適応に影響していた(葛, 1999)。来日動機が自発的ではなかった場合は、望ましくない適応に陥りやすい可能性がある。

最後に、留学生は学生でもあり、年齢的に非常に繊細な時期を過ごす青年でもある。つまり、異文化適応に関わる様々な問題に加えて、青年期特有の自立やアイデンティティに関わる課題も抱えていることが、困難の要因となると考えられる。

## 4) 社会背景による要因

「社会背景による要因」は36個(13.4%)のカテゴリーが該当した。このカテゴリーは、留学生の低齢化など社会背景から考えられる要因を示している。

社会背景と関わる要因においては、留学生自身の低年齢化傾向、日本社会のストレス性などが挙げられた。そのほか、メディアによる影響も、今回の調査で多く言及されていた。母国に関する報道でイライラする気持ちを抱く留学生が多くいる可能性が、今回の調査によって明らかになりつつある。

最後に、留学生支援政策の発展により、日本の留学生支援が良い方向に向かっていることも示唆された。いかに留学生を支援し、留学生支援施設と連携していくか、ということは今後の課題であるだろう。

## 5) 中国文化による要因

「中国文化による要因」は33個(12.4%)のカテゴリーが該当した。このカテゴリーは、中国文

化が留学生の異文化適応に与える影響を示している。

留学生の出身国である中国独自の文化が、留学生に与えている影響も考慮する必要がある。中国では、メンタルヘルスの概念が徐々に普及してきた。しかし、自身のメンタルヘルスへの意識が高くない学生は未だに数多く存在する(王, 2013)。今回の研究でも同じような結果が得られた。自分自身の抱える状態への認識が不十分であるため、自ら助けを求められない状況は、中国人留学生が日本で多くの心理的苦痛を抱えてしまう要因となると思われる。

調査対象者からの意見に、愛国心や自国の文化を重んじる心は、在日留学生の異文化適応にある程度ネガティブな影響を及ぼしているというものがあつた。これに加え、中国人留学生は中国人のみで構成されるグループに固まりやすい傾向があり、中国人同士のコミュニケーションだけで日本での対人関係を完結してしまう傾向もあることが報告された。このことから、在日中国人留学生がホスト国の人との関係を築いていくうえで、ネガティブな影響を及ぼし、その結果、自国の人々だけで構成された狭い人間関係になりやすくなると思われる。

#### 6) 偏見

「偏見」は31個(11.6%)のカテゴリーが該当した。このカテゴリーは、在日中国人留学生が日本で偏見を感じる場面を示している。

偏見は、ある集団とそのメンバーに対する正当化できない否定的な態度と定義されている。そして、偏見は「態度」であり、「集団またはそのメンバーに対する正当化できない否定的な行動」を意味する差別とは異なる概念である(伊藤, 1997)。田中(1996)は在日中国人留学生327人を対象にした調査においては41%の中国人留学生は日本留学の不满として「アジアからの留学生を差別する傾向がある」と回答した。今回の調査からも、偏見が異文化適応に及ぼす影響が示唆された。

しかし、偏見がもたらした影響にはポジティブなものとネガティブなものがあることを理解しなくてはならない。留学生の来日当初は、外国人という立場であることがお客さん扱いに繋がり、より良い適応に繋がったと感じる人がいる。その一方で、いつまでもお客さん扱いをされることに疎外感を感じる留学生もいる。また、調査対象者の中には、偏見を持たれた経験を訴えても理解してもらえないこと、または経験自体が否定されることによって、偏見によるネガティブな感情を打ち消すことが難しい、とする記述もあつた。そのため、偏見そのものよりも、偏見を持たれた経験をどのように処理していくかが個々の留学生の課題であるといえる。

#### 7) 日本への同一化が期待される現状と同一化することへの抵抗

「日本への同一化が期待される現状と同一化することへの抵抗」は30個(11.2%)のカテゴリーが該当した。このカテゴリーは、留学生が日本文化に同化することに対する葛藤を抱えている心境を示している。

日中間の文化的距離は近く、中国人留学生が日本文化と同一化することは容易であると思われる。その一方で、中国人留学生は日本への同一化することに、少なからず抵抗感を感じていることが、本調査からわかつた。

先行研究から、ホスト国側の心情として、自国に滞在するマイノリティの文化変容態度に関して、ある程度の期待感を持っていることがわかつている(Bourhis, Moise, Perreault, & Senecal, 1997)。西欧諸国においては、マイノリティは「統合」という文化変容態度をとることが最も望ましいと考えられることが多い。その一方で、ドイツでは「統合」よりも「同化」を望ましいと考える傾向があることがわかつている(Zick, Wagner, Van Dick, & Petzel, 2001)。日本文化の特徴は、個性よりも協調性、個人よりも集団を重視しており、マイノリティの文化変容態度に対しては、「同化」を望むとい



う面で、ドイツと類似している可能性がある。

文化変容のプロセスにおいて、マイノリティに所属している個人が、同じマイノリティに所属している他のメンバーに自国文化よりもホスト国文化への同一化が強い(=同化)と判断されてしまうと、個人がグループ内で孤立してしまう可能性がある」と指摘されている。また、ホスト国文化への強い同化期待は、文化変容を担う個人のアイデンティティに脅威を与える可能性も指摘されている(Castillo, Conoley, Brossart, & Quiros, 2007)。ホスト国からの強い同化期待により個人のアイデンティティが脅かされる場合、コーピング対策として脅威のもとから離れようとすることがある。これにより、ホスト国文化から離れ、自国文化により多く関わろうとする行動が予想される(Rumbaut, 2008)。これは、ドイツにおけるムスリムの研究で実証されており、この研究では、ドイツ人からの「同化」期待が強いほど、ムスリムの人が「分離」という文化変容態度に陥りやすいことが明らかになっている。つまり、「分離」という文化変容態度が望ましくない異文化適応へ繋がる可能性も否めないのである(Kunst, David, 2013)。

日本でも、ドイツのように同化への期待が強いと仮定すると、日本人は在日外国人に対して、自分たちのしきたりを尊重し、文化を学び、できるかぎり同化すべきだと考えている可能性がある。しかし、本研究の対象である中国人留学生を例に挙げるならば、完全に中国文化を捨てて日本文化に同一化するように要求しても、それは拒否されるだろう。なぜなら、中国人留学生は愛国心も強く、自身のアイデンティティが脅かされると感じた時点で、日本への同一化に対する抵抗感を感じ始めるからである。しかし、留学生は日本へ来ていることから、母国文化より日本文化を大事にすると思われ、母国文化に同一化することも難しくなる。これにより、日本文化に同一化することも、中国文化に同一化することもできなく、周辺化という状況になることが予想される。

以上のことから、中国人留学生は日本との同一化が求められる際に、日本への同一化を抵抗する気持ちを持つ一方で、自国文化との同一化の際に生じる母国の仲間からの拒否により、困難な状況に陥っていることが予想された。Sun(2013)の研究では、中国人留学生が日本において周辺化という文化変容態度を取る傾向が最も多いことが指摘されていたが、その結果は、本研究で得られた結果とも共通している。

#### 8) 日中文化に基づく適応しやすさと適応しにくさ

「日中文化に基づく適応しやすさと適応しにくさ」には 17 個 (6.4%) のカテゴリーが該当した。このカテゴリーは、日中文化の類似性が異文化適応に与えるネガティブとポジティブ両方の影響を示している。

日本と中国は、衣食住などの日常生活の多くの側面で類似した点がある。また、外見的な特徴からは、母国を見分けるのがやや難しいことでも知られている。そのため、日本文化を自国の文化の延長線上にあるものとして見ている中国人留学生も少なくない。このような考えを持ったまま日本での生活を始めた場合、来日当初は類似点が多いので望ましい適応を示すかもしれない。しかし徐々に周りが見えてくるようになると、当初は気づかなかった、あるいは気づかないふりをしてきた様々な相違点に気づくこともある。

中国人留学生が気づけずにいたような要因も、望ましくない適応に繋がる重要な点であると考えられる。また、文化の類似性という意味では、ホスト国としての日本側は文化の差異を無視しがちな傾向があり、中国人留学生へのサポート不足になっている可能性も否定できない。

## VI 本研究の限界点、および今後の展望

本研究は、在日中国人留学生を対象に調査を行い、在日中国人留学生の異文化適応に影響を及ぼす要因を探索的に検討することができたと考える。

しかし、分析を行った研究者3名は在日留学生であった。そのため、研究者自身の経験が分析結果へ何らかの影響を及ぼした可能性も否定できない。今後の研究では、日本文化を深く分析した上で、異文化適応理論、特に青年期のアイデンティ課題にも関わる文化変容態度理論の日本における応用可能性を検討していく。

<付記>本研究にご協力くださった皆さま、論文推敲にあたりご協力頂きました大家己恭様、小野島萌様、李孝テイ様に深く感謝致します。

#### 文献

- 朝野聡・北田豊治・野原忠博 (1998). 日本人学生とアジア留学生におけるストレスコーピングと健康に関する比較研究 工学院大学共通課程研究論叢, *36*, 209-223.
- 文部科学省・外務省・法務省・厚生労働省・経済産業省・国土交通省 (2008). 『留学生30万人計画』骨子
- Babiker, I., Cox, J., & Miller, P. (1980). The measurement of culture distance and its relationship to medical consultations, symptomatology and examination performance of overseas students at Edinburgh University. *Social Psychiatry*, *15*, 109-116.
- Berry, J. W. & Sam, D. L. (1997). Acculturation and adaptation. In J. W. Berry, M. H. Segall, & C. Kagitcibasi (eds.), *Handbook of cross-cultural psychology*, *3*, 291-326. Needham Heights, MA: Viacom.
- Berry, J. W. (1980). Acculturation as varieties of adaptation. In A. Padilla (Ed.), *Acculturation: Theory, models and some new findings*, 9-25. Boulder, CO: Westview.
- Berry, J. W. (1997). Immigrants, acculturation, and adaptation. *Applied Psychology: An International Review*, *46*(1), 5-33.
- Berry, J. W. (2006). Acculturative stress. In P. T. P. Wong, & L. C. J. Wong (eds.), *Handbook of multicultural perspectives on stress and coping*, 287-298. New York: Springer.
- Berry, J.W., Kim, U., Minde, T., & Mok, D. (1987). Comparative studies of acculturative stress. *International Migration Review*, *21*, 491-511.
- Bourhis, R. Y., Moise, L. C., Perreault, S., & Senecal, S. (1997). Towards an interactive acculturation model: A social psychological approach. *International Journal of Psychology*, *32*(6), 369-386.
- Castillo, L. G., Conoley, C. W., Brossart, D. F., & Quiros, A. (2007). Construction and validation of the intragroup marginalization inventory. *Cultural Diversity and Ethnic Minority Psychology*, *13*, 232-240.
- 独立行政法人日本学生支援機構 (JASSO) (2017). 平成28年度外国人留学生在籍状況調査結果 [http://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl\\_students/data2016.html](http://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_students/data2016.html) (平成29年8月1日取得)
- 葛文綺 (2003). 中国人留学生の適応度に影響を与える個人属性について 学生相談研究, *23*, 274-283.
- 葛文綺 (1999). 留学生の異文化適応に関する研究—来日目的、対日イメージと適応度との関連を中心に— 名古屋大学教育学部紀要 (心理学), *46*, 287-297.
- 葛文綺 (2007). 中国人留学生・研修生の異文化適応 溪水社
- 岩男寿美子・萩原滋(1987). 留学生が見た日本:10年目の魅力と批判. サイマル出版会.
- 井上奈良彦・アナ・クリスティナ・メリノ (2007). 日本の国費留学生の異文化的適応—九州大学における複数の事例調査—九州コミュニケーション研究, *5*, 61-74.
- 伊藤武彦 (1997). 偏見と差別の心理と留学生への対応 井上孝代 (編) 留学生の発達援助: 不適応の実態と対応 多賀出版(第5章) 95-107.
- 川喜田二郎 (1967). 発想法—創造性開発のために 中央公論社
- 小坂井敏晶 (1996). 異文化受容のパラドックス 朝日新聞社
- Kunst, J. & Sam, D. (2013). Relationship between perceived acculturation expectations and Muslim minority youth's acculturation and adaptation. *International Journal of Intercultural Relations*, *37*(4), 477-490.
- 馬斌 (2007). 在日中国人大学院生における精神的健康度とその心理・社会的要因 順天堂医学, *53*, 200-210.
- Nagy, S. (2012). Japanese-Style Multiculturalism?: A Comparative Examination of Japanese Multicultural Coexistence. *Japan Journal of Multilingualism and Multiculturalism*, *18*(1), 1-18.
- OECD (2015). *Education at a Glance 2014*, OECD Indicators. Paris: OECD Publishing. (OECD (編) 徳永優子・稲田智子・西村美由起・矢倉美登里(訳) (2015). 図表でみる教育 (2015年版) 経済協力開発機構 明石書店
- Ozeki, N., Knowles, A., Ushijima, H. & Asada, Y. (2006). Analysis of transcultural stress factors and the mental well-being of foreign Chinese-speaking students in Aomori. *Aomori University of Health and Welfare*, *7*, 9-16.

- Redfield, R., Linton, R., & Herskovits, M.J.(1936).Memorandum on the study of acculturation. *American Anthropologist*, 38, 149-152.
- Rumbaut, R. G. (2008). Reaping what you sow: Immigration, youth, and reactive ethnicity. *Applied Developmental Science*, 12(2), 108-111.
- 総務省 (2006) 多文化共生の推進に関する研究会報告書：地域における多文化共生の推進に向けて
- Schmitz, P. (1992). Immigrant mental and physical health. *Psychol. Dev. Soc. J*, 4, 117-131.
- Social Science Research Council. (1954). Acculturation: An exploratory formulation. *American Psychologist*, 56, 973-1000.
- Sun, Y. (2013). Chinese students in Japan: The mediator and the moderator between their personality and mental health. *International Journal of Psychology*, 48, 215-223.
- 田中共子 (2000). 留学生のソーシャル・ネットワークとソーシャル・スキル ナカニシヤ出版
- 田中共子(1996). 日本人チューター学生の異文化接触体験(2) その役割と異文化交流に関する質問紙調査 広島大学留学生センター紀要, 7, 84-108.
- 田中共子・田畑佳則(1991).外国人留学生の日本生活における問題—留学の動機および満足感との関係— 中国四国教育学会 教育学研究紀要,37(1), 364—369.
- 湯玉梅 (2004). 在日中国人留学生の異文化適応過程に関する研究—対人行動上の困難の視点から— 国際文化研究紀要, 10, 293-328.
- Wang, C., & Mallinckrodt, B. (2006). Acculturation, attachment, and psychosocial adjustment of Chinese/Taiwanese international students. *Journal of Counseling Psychology*, 53, 422-433.
- Wang 王椿阳 (2013). 「高等学校心理健康教育课程的调查与分析—提高大学生心理健康意识是心理健康教育的关键」 『教育与教学研究』, 27(03), 17-19 頁.
- Ward, C. & Rana-Deuba, R. (1999). Acculturation and adaptation revisited. *Journal of Cross-cultural Psychology*, 30, 422-442.
- Ward, C., Bochner, S., & Furnham, A. (2001). *The psychology of culture shock*. East-Sussex, UK: Routledge.
- 殷梦茜 (2016) 在日中国人留学生の異文化適応における愛着および文化変容態度の役割 お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科修士論文 (未公開)
- 赵霞, 孙宏艳 (2008). 「中日韩美四国高中生消费意识与行为的比较研究(下)」 『学生发展与德育管理 中国青少年研究中心』, 11, 46-47.
- Zheng, X., & Berry, J. W. (1991). Psychological adaptation of Chinese Sojourners in Canada. *International Journal of Psychology*, 26(4), 451-470.
- Zick, A., Wagner, U., Van Dick, R., & Petzel, T. (2001). Acculturation and prejudice in Germany: Majority and minority perspectives. *Journal of Social Issues*, 57(3), 541-557